随想

娘とフランス

秋元隆夫

私の長女（小学四年生）は女では珍らしい宵越しの金は持たない性分で、私も妻も常に頭を痛めているが、この一月初旬、貯めたお年玉を早くなにかに使おうとムズムズしていた。私はからかい半分に

「つまらぬことに使うより、いっそ新幹線に乗ってパッと使ってみろ。気分がスカッとするぜ。」

と言ったところ、即座に

「あら、名案ね。」

ときた。

けれども、まさか娘一人を新幹線に乗せる訳にはゆかないし、またあれは冗談だと言ってみても娘が承知する訳もなし、返答に窮していたら、妻が横合から

「それはいいことね、行ってらっしゃい。これからはなんでも聞いて、見て、感ずることが一番大切なのよ。変なものを買うより、余っ程その方が役に立つわよ。」

とハッパをかける始末なのである。とうとう私は一策を呈して

「よし、今度の出張の時に連れて行ってやろう。でも、土曜日にうまく出張出来たらのことだよ。それに、日曜日は一人で『ひかり』で帰るという条件だが……」

「あら、ホテルで泊めてくれるの、その費用はお父さん持ちね。それだったら一人で帰るぐらい平茶羅よ、『ひかり』は勝手に京都まで運んでくれるもの。」

妻もすかさず

「そうよ、大丈夫、大丈夫。」

私は内心一人で帰れと言えば、子供のことだから尻込みすると思っていたのに、娘は言うにおよばず妻までハッスル有様で、娘はお年玉で切符を購入し、私と連れ立って上京した次第。さて、羽田空港へ行った時のことである。その日は、初夏を思わせる気候で滑走路には陽炎が燃えていた。丁度、国際線にエールフランスの美しいツートンカラーのジェット機が飛び立つところであった。送る者、送られる者がゲイトを挟んでごった返していたので、私たちは混雑を避けて有料展望台に行った。私の脳裏には機体に書かれてあるフランスという字がこびりついて離れない。――約十七年前の昭和二十二年――。白線高校生であった私は、フランスという国に異常な興味と関心を抱いていた。というのは、当時私は不図したことからルーヴルの名画の複写を見て、物の怪につかれたように複写を求めて焼土の町を歩き廻った。でも、それだけでは収ま

らずなんとかホンモノの画が見たくて見たくて堪らず、遂にある日、学校をサボッて倉敷の大原美術館へ出掛けて行った。館内に歩を運ぶと、そこには何百というホンモノがずらりと並んでいるではないか。モネもいる。ルナールが微笑んでいる。セザンヌが手招いている。私は何年も逢わなかった恋人に逢ったように足が震え、胸のときめくのを押さえきれず、何時間も立ちつくしてしまった。改めてこれらを創らせたフランスという国が羨しく、敬意を表さずにはおれなかった。たまたま、西洋史でフランス革命の講義を受けている時であった。近代民主主義の源であるフランス革命——もしこの革命がなされてなかったら、果して現代の自由がこんなに早くやって来ていただろうか。この革命をなしとげたフランス人は実に偉大な国民である。優雅と勇気を同時に持ち合わせているフランス人、モンテーニュの言葉を借りれば

「フランス人は革命的であると同時に伝統的である」

これが最も端的に表現している。

それからの私は、なんとかしてフランスに行って、この眼で素晴らしい芸術と歴史を確めて来たいという願望にとりつかれた。けれども十七年経った今尚実現出来ない。貧乏暇なしで。でも、行きたいのは今でも変りはないが、恐らく行けないだろう。と些か悲嘆に暮れている私の横で、娘は無心に十円玉を抛り込んで望遠鏡と取っ組んでいる。そうだ！　この無鉄砲な、強心臓の娘、必らず十年経てば

「お父さん、私、フランスへ行ってくる」

と、いとも簡単に言い出すに違いない。私は自分が行けなかった代りに、なんとしてもこの娘はフランスへやってやりたい、やってやろう。そしてその時、私の口からついて出る言葉は

「行っておいで、勉強なんかするんじゃないよ、見ておいで、伝統と革命の歴史を」

そう言って娘をこのゲイトから送り出せたらと、夢のようなことを考えていると

「お父さん、見てごらん、ほら、エールフランスが飛び立つわよ」

機は飛行場の端から轟音を立てつつ滑走し、やがて春霞の中へ消えて行った。

（昭二七大文卒・東映プロデューサー）

同志社人とトルストイ

末包丈夫

戦後既に二十年になる。同志社のキャンパスも一変した。戦前の赤煉瓦の建物が老樹の青葉若葉の陰に隠見したエキゾチックな風景は今はない。ただ正門附近、「良心」の碑が立つあたりが戦前の趣を残すのみとなった。私は門を潜る時、横目でちらりと碑をながめながら、同志社の今昔に思をはせることがある。

さきごろ私は「トルストイと東洋」と題する書物を読んだが、その中の日本に関する章に、トルストイが生前会った日本人のことが出ていた。ギリシャ正教の司教になる目的でキエフの神学校に留学中トルストイに近づき、トルストイの東洋哲学、特に老子哲学の研究に協力した小西増太郎（現スポーツ評論家小西得郎氏の父君）や、営

林事業視察のために渡露し、偶然散歩中のトルストイに見出されて、トルストイと話す機会を得た三人の日本人林業者を除くと、六名の日本人が、たとい欧米旅行の途次にあるにしても、露都ペテルブルグから幾百キロも離れたヤースナヤ・ポリヤーナの僻村にトルストイを訪ねている。その六名中四名までがわが同志社人である。

明治二十九年（一八九六年）民友社々長徳富猪一郎が同社々員深井英五を伴なってトルストイを訪問したことは、蘇峯自身が語る、漢詩朗吟でトルストイを驚かしたエピソードによっても、遍く人の知るところ。芦花のトルストイ訪問（一九〇六年）も、有名な「順礼紀行」になって周知のころであろう。

同志社人として四番目のトルストイ訪問者は原田助であった。明治四十三年（一九一〇年）、すなわちトルストイ死去の年の春四月、同志社社長兼校長の原田は、鉄道事情視察を目的に渡欧した当時の鉄道院の水滝という役人と同道して、前記小西増太郎の紹介状をもってヤースナヤ・ポリヤーナを訪問している。「同志社五十年史」によると、原田はエディンバラにおける宗教大会に列席かたがた大学の資金募集のために外遊したとあるから、その折トルストイを訪問したのであろう。

他にトルストイと文通した者の中に、同志社人としては英国留学中の横井時雄があり、また平民新聞時代の安部磯雄がいる。

ロマン・ロランはトルストイを評して、「彼はわれわれの良心である」と述べている。わが「良心」の碑の字を書いた蘇峯はトルストイについて、「善人は世界の宝なり。翁の如き之に庶幾し」と評している。

アジア・アフリカの後進諸民族に対する西欧列強の搾取侵略に対し激しく抗議し、日清・日露の人間殺戮戦争を批判し、平和・平等・暴力否定をうったえたトルストイの良心の叫びは、世界の良心の声であり、新島先生の「良心」教育を受けた明治の同志社人達が、いち早くこれに応えたと言えよう。

よい伝統は大切にし、発展させなければならない。

（経済学部教授・ロシヤ語）

表現ということ

戸川晴之

米国の標準局の資料研究所がおこなった電子計算機による文章構造の調査によると、五五〇の文章について、独自の構文と考えられるものは三五五で、僅か一二が共通の構文のものであるということである。これは「文は人なり」の科学的裏づけであり、同時に文章を書く人の表現力がいかに多種多様であるかということを示唆している。

では、表現とはどのようなことを意味するのであろうか。「表現する」とは心の「内なるもの」を言語を媒介として「外にあらわす」行為であると一般に考えられている。（この場合、「言語を媒介として」というのは言語表現をさすためであって、音楽や絵画、舞踊によるもの、或は動作や表情

によるものなど、すべて表現ということができるからである。)

表現をこのように考えると、言語というものはこうした関係においてなりたつものであるということができるだろう。ところがこうした関係は至極簡単なもののようであるが、実際はそうではない。例えば、文学作品にとりあげられている「意識」のようなものは、それが言葉以前のものであるにもかかわらず言葉に表現しなければならないという問題、また内なる実体を表現しようとする主体の態度といったものを、いかに表現に織りこむかという問題など、これらは表現にたいして何らかの制約として働くものであるが、これらはまた表現の特画性を生みだす要因でもある。

一方、表現として外にあらわされたものを考えるならば、ここでは文、語がその対象としての実体とされ、文法論、修辞学、意味論、文体論などが関与する分野となるのであって、表現を現実にとりあつかう場合の出発点なのである。しかし表現という場合は、文法論で論じるように単に文、語をあるがままに受けとるのではなくて、もっとひろく、なぜこのような文や語が用いられたか、それによってどのようなニュアンスが伝えられているか、といったことをも考慮の対象にいれなければならない。例えば「風に木の葉が揺れている」という文は英語で "The leaves of the trees are moving in the wind." である。ところが in the wind のかわりに on the wind 或は under the wind ともいうことができる。on the wind は「風に乗って」といった気持が表現されているのであって、この wind は「そよ風 (breeze)」といった意味であり、under the wind の方は「風の力を受けて」といった感じをあらわし、この場合の wild は「強風 (strong wind)」を暗示している。さらに moving にたいして rustling を用いると風に揺れる木の葉までも伝えることができるのである。

このように、表現というものは、表現主体の伝達行為であるとともに、相手を予想し、その相手によって表現主体の意図なり、感情なりが理解されてはじめて完成される行為であるというべきであろう。

(文学部教授・英語表現法)

心境

今泉隼雄

基督教主義教育に従事せんと志して、公立中学校教員を辞めて当時の大学文学部神学科に入学したのは昭和二年四月であった。一般学生より少々年は上であったが久振りに学生になった事に対して清新な気分を味うことが出来たことはこの上もなき楽しいものであった。同級生も十名までだから極めて親密にしかも温厚な人達ばかりで、卒業後もそれぞれの立場で働らき、過ぐる六月上旬、中村遥氏の所で同級会を開催し、五名の者が集まり、母校の事を語合い、殊に同志社教育の中核ともいうべき大学神学部のために山崎教授を激励しその健闘を祈った。

私も熟々現在までの人生の行程を反省して基督教主義教育の在り方、具体的にいう

と現在の基督教諸学校には種々様々な困難な問題のあることを感ずる。学校経営の当事者は勿論だが、そこに教鞭をとる一人の教育者としても良心的に考えれば考えるほど幾多の難問題に遭遇する。その度ごとに憶出されるのは新島先生同志社創業当時の苦難の歴史であり、またこれに由りて更に前進する勇気が与えられるのではないかと考えさせられる。そこには学校行政面の問題もあれば、学校にとって最も重要な教育内容の問題もある。この点において私は同志社学園がユニークな存在たらんことを願っている。

誰しも自分の在学した当時が最善の時代と考えるが、戦後のことは別として戦前の時代で同志社学園が比較的に平和であり、発展をしたのは私たちの在学した海老名総長時代であったと思う。過去と将来とを思いめぐらせて今秋の創立九十年を画して更に母校の負うている使命達成が実現されることを願っている。

（昭五大文卒・平安女学院講師）

サマリヤ人の物語

奥村竜三

「自分を愛するように、あなたの隣り人を愛せよ」との、その隣り人とはどんな人かとの質問に答えて、イエスが話された物語は聖書ルカ伝第十章に記されていて誰でも知っている教訓です――あるユダヤ人がエルサムからエリコに下って行く途中強盗にあい、半殺しにされ、着物も持ち物一切を盗まれた。そのところにユダヤの宗教家や立法学者が通りかかったが、何れも迷惑がかかってはと思って見て見ぬふりをして通り過ぎた。ところが平常ユダヤ人から軽蔑されているサマリア人が負傷者を見て気の毒に思い、至れり尽せりの親切をし、わざわざ自分の馬に乗せて宿屋につれて来て、宿の主人に十分の看護をしてくれ、これで不足したら私が帰途立ち寄って、いくらでも支払うからといって二デナリのお金を渡して翌朝旅立って行った。

これが良きサマリヤ人（グッドサマリタン）の教えで、彼のごとく国境や宗教や人種の別を越えて本当の愛の行為をせよというのである。

さて私の後日譚はここから始まるのです。この良きサマリヤ人の愛の行為について一番感激したのはもちろん負傷したそのユダヤ人であった筈ですが、事実はそうではなかった。むしろ一番感激し共鳴したのは宿屋の主人でした。すなわち負傷した旅人は日が経つにつれて地金が出て来たというのか、だんだん要求がましくなって来た。この宿の主人は自分を救ってくれたあのサマリヤ人から幾何かの金を受け取っているし、また帰途立ち寄って、いくらでも嵩んだ費用を払うといって旅を続けて行ったそうだ。この俺のお蔭で主人はいい客をとったというものだと考え出して、それから何かにつけて要求がましくなって来た。もっとよいご馳走を出せ、もっと日当りのよい部屋に移らせ、まだまだ養生する必要がある等々と、実に際限のない要求で、主人と宿の従業員も全く疲労してしまった。何とかして良きサマリヤ人の愛の行為を見

習うような気持をもたせ得ないものかと苦心するのでした。

その後数日たった朝、かの良きサマリヤ人が訪ねて来て一切の費用を支払って、負傷者を伴れて旅立って行きました。そのサマリヤ人の後姿に神々しい後光がさしているのを拝した。その時主人の口から「愛は忍耐である」との言葉が出て来ました（後日譚終り）

附記　多くの人々が後進国の人は実にデマンデンクである、際限のない要求をすると批評するが、考えて見るとそれは過去幾世紀の間先進国の植民地政策によって搾取された結果で、植民地から資源を安く自分の国に運んで、それに対し与えるべき教育も社会福祉の事も手をつけないで奴隷のような状態にすてて置いた結果である。地球上三分の二、すなわち二十数億の人々すなわち東南アジヤ、近東およびアフリカの人々の貧困と無智と不衛生の人類の三悪の現状は実に先進国の搾取植民政策の結果であると思う。先進国の後進国援助――技術援助、経済協力、留学生援助は過去の罪条えの罪亡ぼしであると思う。彼らの国民性のなかに確かに搾取された民族の爪後が残っている事を感ずるのです。

（関西国際学友会館長）

ともだち

菅　琴　二

今年は私たちが同志社普通学校を卒業してから五十二年目に当る。かえりみると、われわれクラスメートの中からも色々な方面に立派な業績を残された諸君も少くない。しかし何と言っても大衆の心をとらえ、ずば抜けて大衆の人気を集めたものは山本宣治君を第一とする。

山本君は宇治市花屋敷の出で、若くして米国に渡り、明治の末年帰朝して、同志社普通学校の四年に編入せられ、われわれと二年間、同じ教室で学んだのである。同志社時代彼について思い起すことは、学校でも寮でも彼のいるところ常に数人あるいは十数人の学友が彼を取り巻き、彼の話術に魅せられていたことである。

同志社を出た年、彼と私は相共に三高に入学した。私は工科に、彼は物理・動物・農科等を包含する二部乙類に席を置いた。卒業間近になって一老教授が彼をその居室に招き、山本君は東京大学志望だそうだが、東大では何を専攻する心算かと聞かれた。勘の鋭い彼は老教授が何を言わんとするかを察知し、私は東大では動物を専攻しようと思う、と答えた。老教授は安堵の態で、もし君が物理をやる心算ならば、もう一年三高に上るのが君のために良いと考えていたのであると説明をした。後年、彼が労農党首領京都府選出の代議士として華々しい活躍を続けていた頃は、その頭脳の明晰さにおいても一つの驚異的事実として受取られ、その没後計量したところでは、それまで脳味噌の最も重いとされていた桂太郎のそれを上廻ったと伝えられたものである。事実それ程に良い頭脳も、使うに所をえないと右のような、むしろ滑稽なエピソードさえ生れるのである。私は人に所をえさせる事のいかに大切であるかを説くに当って、常に山本宣治君の例を引用したものである。

大学は彼は東大に、私は京大に別れ別れに入学したので、彼と会う機会もなかったが、大学三年の夏休み（一九一九年）に私は夏から年末近くまで東京住いをやったので、再び彼と会う機会が生まれた。

ある時、同志社校友会東京支部の会合があるそうだから出ようじゃ無いかと言うので、二人連れだって出席をした。当時の先輩には深井英五氏、小野英次郎氏ら天下の錚々たる人物がたくさんおられたが、われらが入って行くと、新人と言うので敬意を表してくれたのであろうか、深井氏は立って来て握手をしてくれたのを覚えている。

テーブルスピーチの頃になると若き代表として山本君が指名を受けた。スピーチは彼の最も得意とするところで、実に堂々とユーモラスにやってのけたが、最後に私（山宣）は来年七月には東大動物学科を卒業するので、今卒業論文で多忙を極めているが、論文の題名は「イモリの睾丸」というのであると言い放った。聴衆は、瞬間、度胆を抜かれたようであったが、次の瞬間には割れんばかりの喝采裡に彼のスピーチは終った。はたして彼の論文の題名が右のごとくであったかどうか、私の知るところでは無いが、トッサに聴衆の心を捕えるのは彼の天分といって良いと考える。

当夜の出席者の中にはまだ存命の方も多かろうと思うが、あの奇嬌な大胆なスピーチをやったのは若い日の山本宣治君であったことを知っているのは、あるいは私一人ではないかと考えている。

（大三普・姫川電力社長）

故田中良一氏
（本誌編集委員）

一九〇〇年三月三〇日　兵庫県明石市大久保町に生まれる。
一九一七年　同志社中学卒業。
一九二五年　同志社大学法学部卒業。
一九二五年―一九二八年　拾五銀行に勤める。
一九二九年―一九三六年　同志社校友会に勤める。
一九三六年　同志社に奉職。庶務課長、総務課長を歴任。
一九五八年　同志社本部監理部長となる。
一九六三年　同志社社史々料編集所長となる。
一九六五年　定年退職。ひきつづき同編集所嘱託。
一九六五年九月十六日　永眠　享年六十五歳。
一九六五年九月二十一日　告別式（於同志社チャペル）